



APP台湾キャンプ参加者たち ©Wang PiCheng (TW)

〈海外ピックス〉

アジアの舞台芸術制作者を ネットワークする試み

—— APP (Asian Producers' Platform) について

横山義志

APP (Asian Producers' Platform) とは、アジアの舞台芸術制作者のネットワークを作ろう、という試みである。主に韓国・台湾・日本・オーストラリアの舞台芸術制作者組織（日本ではON-PAM-舞台芸術制作者オープンネットワーク）が主体となって、2014年からこの順番で、毎年各地で一週間ほどの「キャンプ」を行っている。私はこれまで韓国（2014年）・台湾（2015年）のキャンプに参加してきた。重要な試みだと思うが、参加者以外には見えづらいところもあるので、本稿ではこのAPPの活動を紹介しておきたい。

アジアの舞台芸術制作者のネットワークを作ろう、という話が出るのは、これまでほとんどなかったからだ。舞台芸術関係者の国際的ネットワークとしては、たとえばIETMという組織がある。これはもともとは

Informal European Theatre Meetingの略で、ヨーロッパの劇場関係者が非公式に集まって共通の課題について語り合う、というものだった。近年ヨーロッパの劇場がそれ以外の地域とのネットワークも重視するようになってきたこともあり、今では世界組織になって、ヨーロッパ以外での会合もたびたび開催しているが、ヨーロッパ主導であることには変わらない。だが、アジアにはそれに相当するような組織はない。

もちろん日本と韓国、といった形の二国間交流はかなりあるし、欧米主催の演劇祭・見本市・プラットフォームなどでアジアの舞台芸術関係者がまよって出会う、ということもけっこうあったが、アジアの舞台芸術関係者が自ら音頭を取って集まる、ということは、これまであまりなかった。アジア人がアジアの舞台芸術のネットワークを作っていく、というのは、実はかなり難しいことでもある。それにはいろいろな理由があるが、まず第一に、「アジア」というのが必ずしも文化的・歴史的共通項をもつ領域ではないということがある。そもそも、「アジア」という言葉でどこまでの地域を指すのかすら明瞭ではない。今回集まったのがなぜこの4つの地域だったかという、「信頼できる友人がいたから」だという。APPをはじめに立ち上げようとしたのは主に韓国とオーストラリア/ニュージーランドのメンバーで、以前から交流があり、アジア内でのネットワークが必要だという共通の認識があった。

APPのメインの活動は年に一度の「キャンプ」。一週間弱を一緒に過ごして議論を交わし（「アジアとは何か?」「国際共同製作の課題とは?」等々）、現地の状況をリサーチする。参加者は40人弱。上記4地域からはそれぞれ5人のメンバーと、2人のコーディネーター、それに数人のオブザーバー（主に資金や会場を提供してくださっている団体の関係者）。



筆者による「ふじのくににせいかい演劇祭」の紹介
©Wang PiCheng (TW)



ヒエラルキーなく自由な議論が行われる。中央は鳥の劇場制作の齋藤啓氏、その右に維新派制作の清水翼氏 ©Wang PiCheng (TW)

それ以外に香港、マカオ、上海、マレーシア、シンガポール、ニュージーランドなどから自主的に参加する方々も。日本からは、APPメンバーとして、筆者のほかに清水翼（維新派）、西崎萌恵（アジア舞台芸術祭）、植村純子（劇団衛星／フリンジシアタープ

ロジェクト）、宮内奈緒（りっかりっか*フェスタ）、運営担当として齋藤啓（鳥の劇場）、齋藤努（フリーランス プロデューサー）、西山葉子（国際交流基金）の各氏が参加した。各国の、主に次代を担うべき30代～40代の制作者が、一週間なんとか現場を離れて集まっている。何よりも素晴らしいのは、ヒエラルキーが全くないことだ。演劇祭や見本市などで同業者に会うと、どうしても売り買いの関係になってしまい、利害関係や所属機関の位置づけなどで妙なヒエラルキーができてしまう。だがAPPの目的は、各制作者がまずは個人としてネットワークを築くことだ。2014年の初回ソウル開催のときは出身が異なる5、6人のグループで一つの民家に寝泊まりし、ふとんの上げ下ろしや朝食の準備まで共にすることで、全く水平の関係性を作ることができたように思う。APPでは、見本市や国際ミーティングのように交流する母集団を増やすのではなく、このように、まずは「信頼できる友人」を増やしていく、ということを大事にしている。これによって私もこの2年でアジアの10近い地域に、いつでも相談できる友人ができた。Facebookのグループなどでも連絡を取り合い、TPAMなど他の機会にも会うようになった。これは私の今後の活動にとっても大きな財産になるだろう。

2015年の台湾キャンプでは、ここ数年で大規模な公共劇場が新たに4つオープンするという状況のなかで、新劇場の構想を当事者から聞くことができ、非常に刺激的だった。韓国・台湾と、実際に現地の制作者たちと現場を訪ねてみて驚かされるのは、国境を越えた活動が日常にな



新劇場建設の現場を訪ねる（中央右にアジア舞台芸術祭制作の西崎萌恵氏） ©Wang PiCheng (TW)

りつつあることだ。ともに域内の市場が小さく、その内部だけではやっていけない、という危機感が強い。東南アジアを含めた中国語話者のネットワークも加速度的に深化している。日本の舞台芸術界は多少状況が異なり、国内市場だけである程度成り立っている。この状況を背景に、アジア内でのネットワークが日本を抜きにして形成されつつあるのかも知れない。だが日本の状況も早晩変わってくることだろう。今年2016年6月には、ついに私たち日本メンバーがホストとしてAPPキャンプを受け入れることになる（東京と静岡での開催を予定）。アジアに描かれつつあるネットワークのなかに日本をどう組み込んでいくのか。一つの正念場なのかも知れない。

よこやま・よしじ

ON-PAM（舞台芸術制作者オープンネットワーク）理事、SPAC・静岡県舞台芸術センター文芸部。1977年千葉生まれ。2007年からSPACで主に「ふじのくににせいかい演劇祭」などの海外招聘プログラムを担当。演劇学博士（パリ第10大学）、学習院大学非常勤講師。専門は西洋演技理論史。



個人としてのネットワークを築く（左から香港・西九龍文化区演劇部門芸術監督のロー・キーホン（Low Kee Hong）氏、台北芸術節芸術監督の耿一偉（Keng Yi-Wei）氏、筆者） ©Wang PiCheng (TW)